

堺環濠都市遺跡

SKT
959



調査地遠景（西から）



0414 塼列建物



0415 塼列建物



0416 塼列建物



0417 塼列建物



発見した建物は、塙列建物と呼ばれる蔵と、柱を平石（礎石）の上に建てた礎石建物です。これらはともに慶長20（1615）年の火災面でも発見されています。

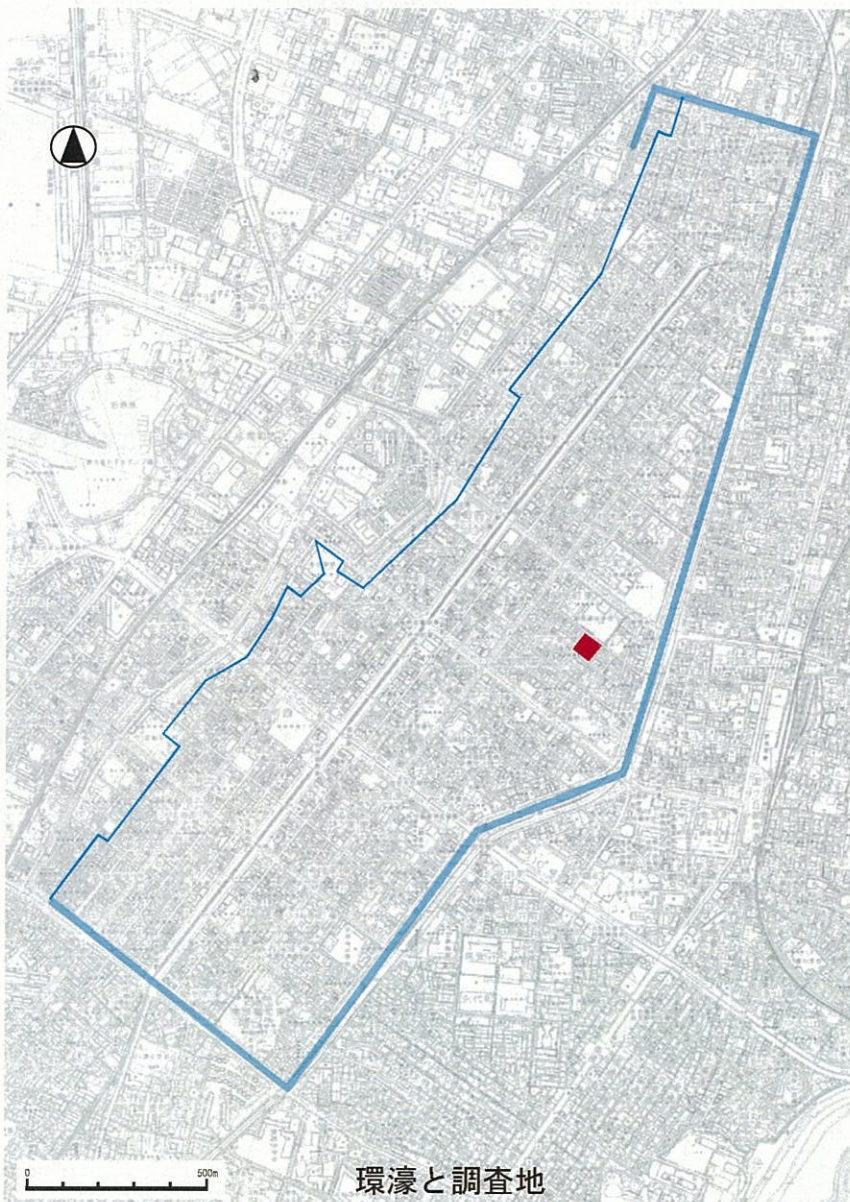
塙列建物とは、地面を方形に掘り込み、その壁部分に塙と呼ばれる平らな瓦質の板を貼り並べた建物で、主に3階建ての蔵と考えられています。また、溝状に深く掘り下げて塙を立て並べたものもあります。残りのよい建物では、2段分の塙が立ち並んでいます。

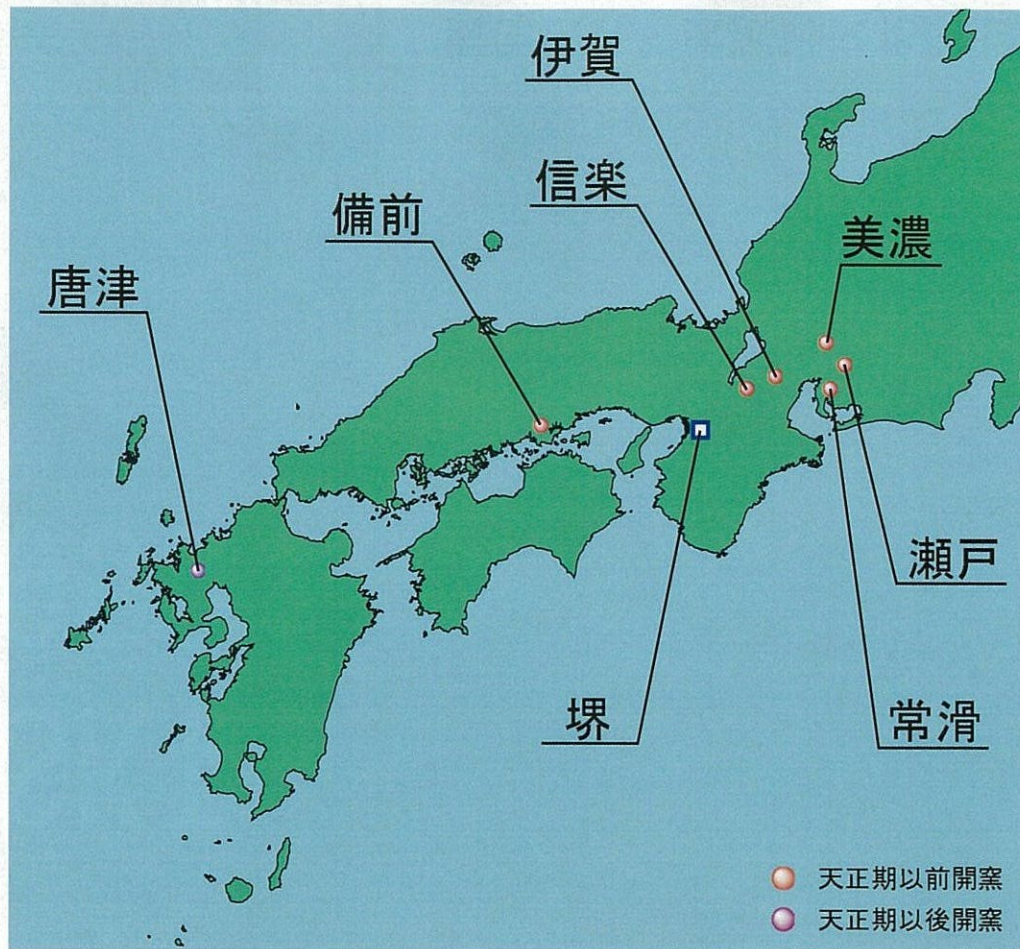
なぜ塙を地中に立て並べるかという点、湿気やモグラなどの害獣が地中から基礎部分に進入するのを防ぐためと考えられています。方形に掘り込んだ底面には礎石を置き、根太木をわたした上に板床を敷きます。なお建物の大きさは、1辺3～5mほどです。

礎石建物は、地面上に礎石を置き、その上に柱を立てた建物です。家屋と考えられますが面積の狭いものもあり、家屋以外の建物もあったと考えられます。

また建物の脇に沿って、通路が延びていることがあります。しかも、建物の端に合わせたように通路が途切れることがあります。まさに路地です。

今回公開します天正期の建物は、構造や並びの方向が慶長期のものと同じです。さらに通路の状況もよく似ています。こうしたことからおそらく、15世紀後半から発展をとげた堺の町のスタイルが、慶長20年の火災まで一貫して続き、火災後、江戸幕府や堺奉行所によって町割が改変されたとみられます。





調査地出土の陶器製産窯

中世の日本で焼き物を焼いた主要な窯（備前・瀬戸・信楽・丹波・常滑・越前）の6ヵ所を総称して「中世六古窯」と呼んでいます。天正期の層からは、「中世六古窯」の中でも備前・瀬戸・信楽・丹波の窯の製品がみつかっています。

天正の火災の後、茶道ブームの最盛期である桃山文化が花開くと、唐津焼が登場します。この頃には、それまでの「侘び・寂び」などの茶道で好まれた道具とは異なり、絵がらや形の華やかな絵唐津や織部・志野などが好まれるようになりました。



左上 中国：青花

左下 日本：備前

(すり鉢・壺)

下 日本：瀬戸（天目碗）



平成 18 年 12 月より戎之町団地建替えに伴う発掘調査を行なっています。発掘調査の場所は、堺環濠都市遺跡の範囲内にあり、その東端近くに当たります。

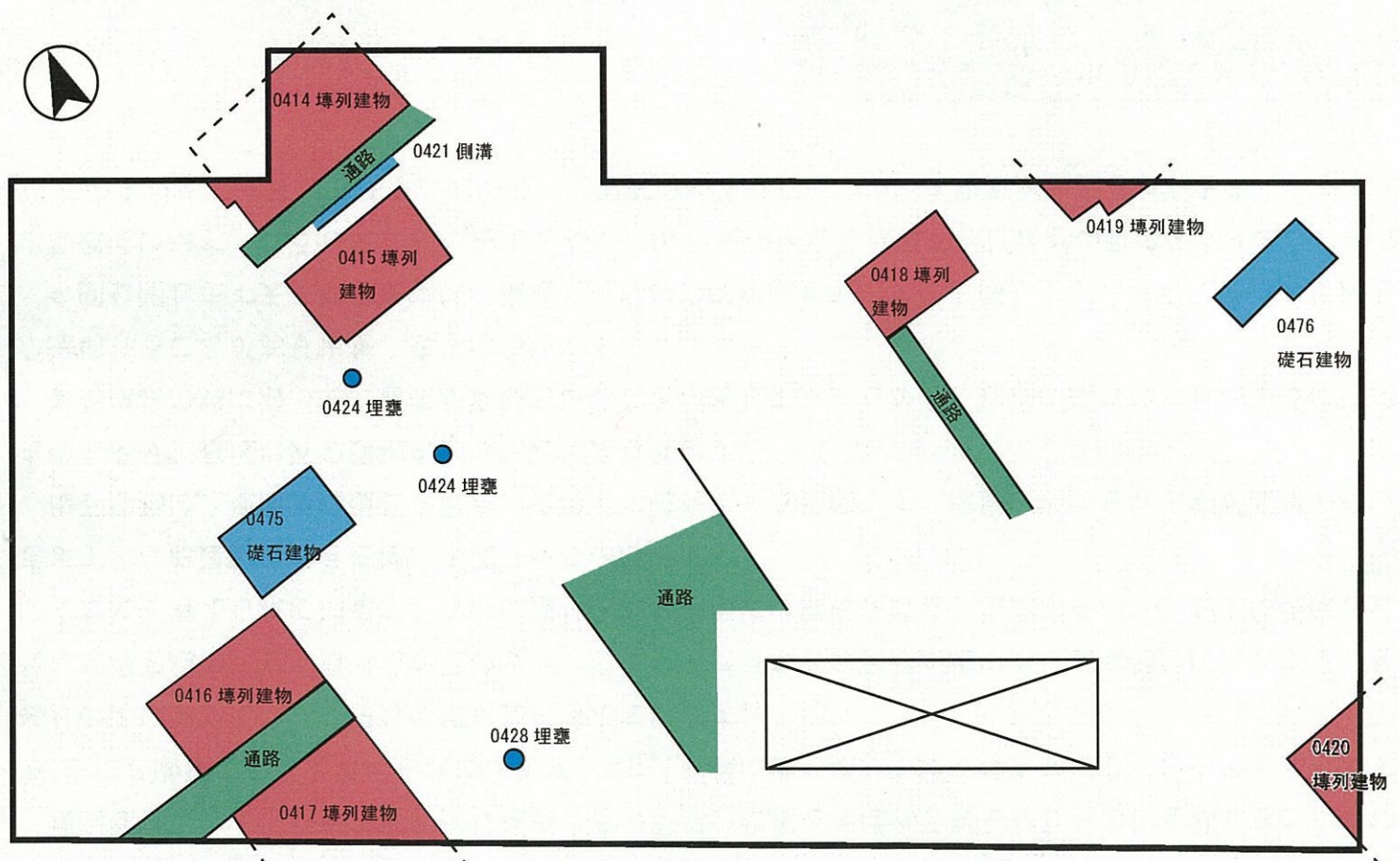
堺環濠都市遺跡は、南北 3 km、東西 1.2 km の大きさです。堺の町は、室町時代後期～豊臣期にかけて、町を防御し、その自治を象徴する濠（環濠）で囲まれていましたが、遺跡の範囲はそれよりひとまわり広く、江戸時代に再び開削された濠の範囲にほぼ該当します。

発掘調査は、江戸時代後期の生活様相を明らかにすることから始め、徐々に掘り下げて、江戸時代中・前期の人々の暮らしを追及してきました。そして今年の 3 月 10 日に現地説明会を開催し、慶長 20（1615）年に大坂夏の陣の前哨戦として豊臣方に焼討ちにあった蔵や建物などを公開しました。

その後、発掘調査を進めたところ、下層で天正 3（1575）年の火災により焼失した蔵群を発見しました。さらに礎石をもつ建物や通路、石を並べた溝なども発見しました。

天正期の蔵の配置は、慶長期のそれとよく似ていて、しかも蔵につながる通路もまた同じ位置にあるものがみられます。このことから、土地利用の在り方が 40 年間あまり変化していなかったことがわかりました。

天正 3 年は、織田信長・徳川家康の連合軍が武田勝頼（信玄の子）を長篠の戦いで破った年であり、また千利休が織田信長から茶頭を命じられ、京の妙覚寺で茶会を催した年でもあります。堺では商人が隆盛を極め、「黄金の日々」を謳歌した頃でした。



天正期建物群（配置概念図）